# Voices

星見月夜

僕らが最初に覚えたのは、嘘を吐くことだった。

誰かを傷つけたり、騙したりするためじゃなかった。ただ、自分の中の一番大切なものを守りたかったのだと思う。十年が過ぎた今、こうして振り返ると良く分かる。僕らは、とてつもなく意地っ張りで、同時に臆病だったのだと。

これは、そんな臆病で意地っ張りで嘘吐きな僕らが、それぞれの持ち場を見つけられるまでの話だ。

僕らが青年期を迎える前の、ちょっとした猶予期間の話だ。

## 1.

五月の連休も終わり、桜の花びらもあらかた散ってしまった頃。高校に上がったばかりの僕は、早くも友達を作ることを諦めていた。

中学時代もそうだったが、どうやら僕は周りのみんなより少しだけ、本音を隠すのが下手だったらしい。もっとも、これは今現在の僕が過去を振り返ってそう思うことで、当時の僕はそんなことを気にするほど殊勝な男じゃあなかった。周りが全部馬鹿に見えたし、実際その通りだと信じて疑わなかった。誰にだってそんな時期がある。そう願いたい。

そんな訳で、僕はいつもひとりだった。休み時間には本を読んでいたし、昼休みには図書室で本を探していた。

その男が僕に声をかけてきたのは、昼休みが終わる間際のことだった。

高校の図書室に静寂と平穏を求めてはいけない。昼休みにもなれば、行く場のない暇人たちが大挙して押し寄せてくるからだ。人が二人集まれば会話が始まるし、三人集まれば笑い声が上がる。そんな訳で、昼の図書室は静寂ではなく活気に満ちた空間になる。

机と椅子が並んだ閲覧スペースは、談笑のための座席に変わる。そして、本来賑わうべき本棚と本棚の間は閑散としている。図書室でなく談話室のような使われ方に、僕はいつも苛立ちを噛み締めていた。

いつもと同じように本棚から適当に三冊の本を選び、貸出カウンターへと足を向けたときのこと。後ろの方で、「あのさ」と無遠慮な声が聞こえた。

まさか僕が呼ばれたとも思わず、黙って数歩進んだ。すると、声の主は僕の背中をやや強めに叩いて自分の存在をアピールした。

「お前さ、二組の石田だろ？　ちょっと相談に乗って欲しいんだけどさ」

僕は振り向いて、視線で非難しながら、相手のことを確認した。背は僕よりショート缶のコーヒー一本分くらい低い。癖っ毛を中途半端に伸ばしているせいで、どこか鈍臭そうに見える。顔は

童顔。を通り越して明らかにガキっぽい。同学年だということは、上履きの色でも分かった。

その男は、いたずらっ子のような笑顔を浮かべながら、妙に偉そうに胸を張って立ち、僕を見上げていた。

知ってる顔じゃなかった。僕には友達なんてひとりもいなかったが、同じクラスの人間の顔くらいはさすがに覚える。つまり、違うクラスの人間だった。

「人違いだよ」

面倒事は御免だ。

僕はそう言って、あっさり立ち去ろうとした。でも、男は引き下がらなかった。

「そんなに警戒しないでくれよ。ちゃんと名札を確認して声かけてるんだしさ」

どうして高校生にもなって名札をつけなくてはならないのか、校則を恨み、それを律儀に守っている自分を恨んだ。

僕は溜め息をひとつ吐いて、正論を口にすることにした。

「相談なら、他の人にした方が良いと思うよ。どんな内容にしても」

誰とも分からない相手に相談しても、問題が解決するとは思えない。まして、誰とも分からない相手の相談に乗れるほど、僕は人間が出来ていない。

「いや、石田しかいないんだ！　頼むよ！」

周囲の視線が、僕ら二人に集中した。大声で叫ぶからだ。しかも、この男の声はやけに良く通る。

僕はまた溜め息を吐いて、手早く本の貸出手続きを済ませ、図書室から出た。図書室は話をする場所でなく、静かに本を読む場所なのだ。他の人がどう使っているかは別として、せめて僕自身は図書室に敬意を払うべきだと考えていた。

扉を閉めて、足早に歩き出す。男は、僕についてくる。

「俺さ、三組の海老原哲（えびはらてつ）っていうんだけど、相談に乗ってくれよ」

身長差のせいか、やや小走りになりながらも僕に食い下がってくる海老原。僕は前を向いたままで答えた。

「進路の相談なら先生にしてよ。将来への不安があるなら、ついでに聞いてくれる」

無遠慮な男に、親切にする道理もない。

「そんな下らないことじゃないんだって！」

ここで「話を聞くだけなら」と仏心を出すほど、僕は人情味溢れる人間じゃなかった。というより、はっきり言って冷酷だった。

「僕よりも人生経験のある人に頼んでよ」

海老原はまだついてくる。諦めずにあれこれと食い下がって来るが、僕は全てをばっさりと切り捨てた。

「そもそも、僕を選ぶ理由もないだろう？」

「でも、石田だったら頭も良いし、いつも本読んでるし、成績も良いしさ。それに、俺のクラスの連中じゃダメなんだって」

どうしてこの男が僕の成績を知っているのか気になったが、それを問いかけるとなし崩しに相談事まで話が進みそうだったので、

黙っておくことにした。世の中には探偵めいたことをするのが趣味の人間もいる。そういった、他人の詮索が好きなタイプなのだろう。

あれこれと言い募る海老原を無視しながら階段を上がり、北校舎と南校舎を繋ぐ渡り廊下に差し掛かった。

「理想の女がいるんだ！」

その声は、南北二つの校舎全てに響き渡りそうなほど、大きな声だった。廊下を歩く人が動きを止め、僕らに注目した。

「助けてくれよ！」

助けて欲しいのは、僕の方だった。

「分かったから、少し落ち着いてよ」

震える眉間を手で抑えて、搾り出すようにそう言った。

「頼むって！」

両の掌をぴったりと合わせ、僕を拝む。どうしてここまで必死になれるのか、知りたいとは思わなかった。

けれど、面倒事からは逃げられそうもなかった。

彼が言うには、理想の女性がいたらしい。

「それはさっき聞いたよ」

大声を出さないこと、騒がないこと、目立つ行動をしないことを条件に、僕は話を聞くことにした。

「石田のクラスにさ、高城梓歩（たかしろしほ）って子がいるだろ？」

高城という苗字の女子なら、確かにいた。下の名前までは覚えていないが、顔も一応は覚えている。色白で目の細い、背の高い女子だ。黒い髪を伸ばしているのは、背が高い女子共通の、コンプレックスの表れだろう。更に酷いと猫背になったりする。

「あの子とさ、付き合いたいんだよ」

「頼めば？」

さっき僕にそうしたように、拝み倒せば良い。あのしつこさを余さず発揮すれば、きっと大抵の女子は折れるだろう。

「そんなみっともない真似出来るかよ！」

溜め息しか出なかった。

「初恋、って訳じゃないけどよ、こんなに好きになったのは初めてなんだよ。ああいう子が彼女だったら、きっとずっと幸せでいられると思うんだよなあ」

窓の外、どこか遠くを見詰めながらそう語る海老原は、間違いなく夢見る乙女の表情をしていたと思う。

「他に何もいらないくらい、幸せになれると思うんだ」

随分と都合の良いことを言う男だな、というのがこのときの偽りない本心だった。

「じゃあ、そう言えば？」

面倒になった僕は、突き放すようにそう言った。昼休みもあと数分で終わってしまう。次の授業は移動教室なので、出来れば予鈴が鳴る前に教室に戻りたかった。

「あのな、俺は本気であの子のことが好きで——」

「本気で好きなら、言えるだろ？」

一度は声を荒げかけた海老原も、僕の言葉の意味が分かったのか、何度も黙って頷いた。ぶつぶつと独り言を言いながら。
「思ってもない嘘で気を引くより、ずっとマシだと思うけどね」
「そうだよな！　俺もそう思うよ！」
予鈴が鳴ったので、僕はその場を立ち去ろうとした。
「陽司！　俺、やってみるわ！」
何かを言い返す気力も湧かず、黙って背中越しに手を上げておいた。

翌日、海老原はより一層の騒々しさで、僕の平穏を乱しに現れた。わざわざご苦労なことだった。
「陽司のおかげだよ！」
僕は黙って本の貸出手続きを済ませて、逃げ出すように図書室を後にした。背中には、たくさんの迷惑そうな視線が突き刺さっているのが良く分かった。
「要するに、上手くいったんだね？」
「当たり前だって！　お前が言った通りにやって、失敗するはずないだろ？」
そこまで過信されても困るが、とにかくこれで僕と海老原との縁は切れるだろう。そう思えば、これまでの迷惑も水に流して忘れてしまえそうな気がした。
「それじゃ、僕は急ぐから」
手を上げて、教室を目指して歩き出す。

「それでよ、やっぱり陽司にお礼しなきゃなんねーだろ？」
話がおかしな方向へと向かい始めた。
聞こえない振りをしつつ、足取りを速めてひたすら歩く。海老原は後ろを小走りについて来る。まあ、教室が隣なのだから仕方ないと言えば仕方ないかもしれないが。
「つっても俺、金ないしさ。頭も悪いし、気も利かないし。何をすれば陽司は喜んでくれるんだ？」
「僕は良いから、彼女に優しくしなよ」
何をされても迷惑なだけだ。というより、放っておいてもらうのが一番有難い。どうしてこの男はそれが分からないのだろう。頭が悪いのだろうか。本人がそう言った通りに。
教室の前に辿り着いた。僕は扉の前で足を止め、はっきり言ってやろうと息を吸った。でも、先に口を開いたのは海老原の方だった。
「とにかく、さ」と一度区切って、「俺、陽司に感謝してるんだよ。お前は恩人だし、恩はちゃんと返すから」とはっきり言い切った。
その口振りは妙に力強くて、今まで僕に向けられたどんな感情よりも真っ直ぐで。
「あ、ああ……」
思わず、曖昧に頷くしかなかった。

そして、僕はその曖昧さを数時間後に後悔することになるのだった。

僕らの通っていた高校は、長い坂の途中にあった。その坂道は、古くは江戸時代から街道として使われていた道で、今でも所々に史跡が遺されている。山の麓から山頂までを真っ直ぐに駆け上がる坂道。その道沿いには市役所や市民会館、それにちょっとしたスーパーがあったりして、この町に住む誰もが通らずには生活出来ないような坂道だ。

登校時は上り。下校時は下り。自転車で通う気にもなれないほど長い坂道を、僕は歩いて通っていた。

春にありがちな、暴力的に強い風。その風に顔をしかめながら、僕は追われるように坂道を下っていた。

「待ってくれよ！」

追われるように、ではなく、実際に追われていたのだが。

「何でついて来るんだよ」

「何でって、寂しいこと言うなよ。ツレだろ？」

声の主は、海老原。他に僕にちょっかいをかけてくるような奴はいない。いて欲しくもない。いや、海老原がいるからと言って嬉しくはないのだけれど。

とにかく、僕は下校時の制服の波を縫うようにして、ひたすら坂道を駆け下りていた。

「何かしらお礼しないと、俺が納得出来ないんだって！」

迷惑だ。はっきり言って。

「また後にしてくれないかな。出来れば十年後くらいに」

「そんな先まで待ってたら、利息で破産しちまうよ！」

別に金利を取るつもりもない。

信号が青になるのを見計らって、いつもは渡らない交差点を渡る。わざと遠回りをするための、苦肉の策だった。

「なあ、仲良くしようぜ？　別に俺がお前に迷惑かけてる訳じゃないんだしさ」

「仲良くする気もないし、迷惑かけてるのに少しは気付いてくれないかな？」

「あはは。陽司の冗談は面白いな」

駄目だもう。何を言ってもどうせ聞いてくれやしないんだ。きっと。

足取りを緩めて、大きく息を吐く。少し高鳴っている胸が落ち着くのを待って、仕方なしに呟いた。

「分かった。何もしないなら来ても良いよ」

僕の部屋に、遊びに。

海老原が言うには、僕が喜ぶようなことをリサーチする必要があるとのことだった。そのためには親しくならなければならず、必然的に僕の部屋に遊びに行くという流れになるのだと。僕には良く分からない理屈だった。

騒がないこと、荒らさないこと、暴れないこと。それと、夜遅くまで居座らないことを条件に、僕は渋々許可をしたのだった。

「お、やっぱり綺麗に片付いてるな」
僕の部屋を見て、海老原はそう呟いた。当り前だ。自分の部屋すら綺麗に出来ずに、一人前とは言えない。
「それで、海老原は何をしたい訳？」
「お。良いオーディオがあるじゃん。これ高かっただろ？」
部屋の隅にある木目調のオーディオセットに、海老原は興味津々だった。僕の話が耳に入らないほどに。
「知らないよ。父さんの趣味だから」
元々僕の部屋は、父さんの趣味の物置部屋のような場所だった。それを、高校受験を機に明け渡してもらったのだ。なので、大きくて重い物はそのままにしてあった。
「天井のスピーカーから音出せるんだろ？」
「らしいね」
僕は電源を入れたことすらなかったが。
「俺こんなの初めて見たよ。なあ、音出してみようぜ？」
「あのさ、海老原」
少し強い口調で、僕は押し留めるように言った。
「何のためにわざわざ来たのさ？」
「ん？　だから、陽司のことを良く知ってだな、恩返しをするためだって」
恩返しとオーディオのどこに因果関係があるのか説明して欲しいものだ。
「別に恩とかそういうのは良いから。それより高城さんと付き合うことになったなら、そっちを大事にしなよ」
「ああ、それは大丈夫なんだ」
海老原が言うには、高城さんは毎日習い事で忙しいらしく、決まった曜日にしか予定が空けられないのだそうだ。
「琴とか華道とか習ってる子って、本当にいるんだな」
「そういうことも調べずに告白した訳？」
もっとも、僕も知らなかったのだが。
とにかく、海老原は彼女が出来たのに暇なのだそうだ。
僕はうんざりした気分で私服に着替え、階段を下りて台所から飲み物を持って来て、ガラスのテーブルを出してコップを置いた。
「なあなあ、何か面白いモンないのか？」
「海老原が面白がる物なんてないよ」
これは嘘だった。
実のところ、押入れを開ければ父さんの趣味の物が山のように積み上げられているし、収納スペースのほとんどは訳の分からないがらくたで飽和していた。僕にとっては鬱陶しいだけでも、海老原のような奴は喜んで家捜しを始めるだろう。そう、この部屋に入る条件のひとつを完全に無視して。
「じゃあさ、ＣＤの一枚くらいあるだろ？　音出してみようぜ」
「ないんだ」
これは半分本当だった。父さんのＣＤコレクションは隣の部屋だし、僕は実際のところ音楽に全く興味が持てなかった。ＣＤを買うくらいだったら、文庫本の一冊でも買った方がマシだと思っ

ていた。
「そうか、ないのか……」
海老原は口調とは裏腹に、それほど残念そうな顔はしていなかった。
その理由は、次の日に明らかになった。
「今日も頼むぜ、陽司！」
放課後の教室でそう声をかけて来た海老原を、仕方なしに部屋まで連れて帰った。
「今日はＣＤ持って来たんだ。なあ、流して良いよな？」
にこにこと、まるでおもちゃを買ってもらった子供のような表情で、僕に詰め寄る。
「うるさくしないでくれよ」
まるで大輪の花が開くような笑顔を浮かべて、海老原は何度も頷いた。これがかわいい女の子だったら好感も持てるのだろうが、背の低い鈍臭い男じゃあ正直嬉しくない。
ともあれ、海老原はオーディオを遊び相手に選んでくれた。これで僕はゆっくりと読書に集中出来る。有難い限りだった。
海老原はバッグをひっくり返して、大量のＣＤを床にばら撒いた。良くは分からないが、英語のタイトルばかりだった。流行の物らしいジャケットは見当たらなかった。
主電源を入れて、ＣＤをトレイに乗せる。再生ボタンを押して、デジタルの液晶が秒数をカウントし始める。
最初に流れたのは、やたら早くてやたら擦れた音だった。正直、僕にはがちゃがちゃしてうるさいとしか思えなかった。
「くー！　やっぱ最高だな！　ウチのボロいラジカセとは大違いだ！」
「とりあえず音量は絞ってよ」
実のところ、僕の部屋はちょっとした防音がされていた。窓ガラスは二重になっていたし、壁も床も少し厚い。なので、音漏れを気にする必要はない。でも、うるさいと読書に集中出来ないのは確かだった。
「これくらいなら大丈夫だろ？　つか、これより小さいと聴こえねえよ」
何故か不満そうな海老原。仕方なしに僕は許すことにした。あまりぶつぶつ文句を言われるのも迷惑だからだ。
そんな訳で、僕は本を読み、海老原は独り言を言いながら音楽を聴くというスタイルが出来上がった。
次の金曜日のことだ。
海老原がいつものように、昼休みの図書室で声をかけてきた。そしていつものように、僕の前で両手を合わせて拝みこんだ。
「放課後、ちょっと付き合ってくれ！」
また面倒事を持って来た海老原に辟易しながらも、断ってもどうせ無駄だと分かり切っていた僕は、二つ返事で「分かったよ」と頷いた。溜め息も付け加えて。

そんな訳で放課後。僕は海老原に付き合わされて、駅前のファミレスにいた。

「梓歩ちゃん、お待たせ。ごめんね、ちょっと遅れちゃって」

緩み切った顔でそう言う海老原の前にいたのは、穏やかな笑顔の高城さんだった。

「これが俺の親友。石田陽司。同じクラスだし、顔は知ってるよね？」

高城さんは黙って頷いた。

「じゃあ、入ろうか」

やや硬い仕草で、先頭を切って店内へと入る海老原。その後ろを付き従う僕と高城さん。

要するに——

付き合い始めたのは良いが、二人きりでいると息が詰まると。そういうことらしかった。全く情けないことだ。

そして、そんな恋人同士の間に挟みこまれる僕は、とても惨めなのだった。

高城さんは、物静かな人だった。控え目に微笑み、控え目にカップを口に運び、控え目に質問をする。それでも口調はしっかりと聞き取りやすいので、陰気には思えない。前髪を人差し指でそっと除けるのが、数少ない癖のようだった。

海老原はそんな彼女を前にして、ただ喜んでいるだけだった。まともな会話はほとんど成立していない。話の主導を握っていたのは彼女だったし、僕は海老原をフォローする気すらなかったからだ。

そんなちぐはぐなお茶会も、何とか一時間が経過した頃。

「ごめん、俺ちょっとトイレ」

海老原がそう言って席を立った。

残された僕は、気になっていたことを彼女に訊いてみることにした。

「高城さんは、どうして海老原と付き合うことにしたの？」

正直な話、彼女は人気が高かった。スタイルも良いし、物腰が穏やかで大人びている。そんなクラスメイトに目をつけていた男子は少なくなかったはずだ。僕は別としても、高城さんに好意を寄せているという話は、ちょくちょく耳に入って来ていた。

そんな僕の問いに、高城さんは少し考えてから、嫌な顔ひとつせずに答えてくれた。

「あのね、私のことを好きだって、言ってくれたから」

「ん……？　そうなの？」

「そう。だって、好きになってくれるのって、嬉しいでしょう？」

まあ、そういうものなのかもしれない。

「じゃあ、高城さんは海老原のこと、好きなのかな？」

海老原は、高城さんさえいれば幸せだと言っていた。なら、高城さんは？

この物静かなお嬢さんは、海老原がいることで少しでも幸せを感じているのだろうか？

彼女はきょとんとした表情で固まり、慌てて口を開いた。まるで、理解出来ないことに直面したときのような反応だった。
「ああ、うん。そうだよね。付き合ってるんだし。もちろん、好きだよ」
自分に言い聞かせるような、納得させるような口調だった。
僕は、質問をしたことを後悔していた。

トイレから戻って来た海老原は相変わらずご機嫌だった。高城さんも、変わらず控え目で穏やかなまま海老原の相手をしていた。
僕だけが、胃の底に何か腐ったものが溜まったような気分で、薄いコーヒーを口に運び続けていた。

ファミレスから出て、高城さんを駅まで送り届けた後で、僕は海老原に訊いてみた。
「高城さんが、理想の女性なんだよね？」
「おうよ！　話せば話すほど好きになってくぜ！」
興奮冷めやらぬ、といった感じだった。
「付き合えるだけで、俺は幸せ者だな！　今なら誰かに殴られても許せそうだ！」
殴るかどうかは別として、ここまで言い切れるのなら、確かに幸せ者なのかもしれない。
でも、僕の心の奥底には、何かがひっかかったままで残っていた。
このときの僕は、男女の恋愛という微妙な感覚を理解し切れてはいなかったし、またそういうものに触れる機会もなかった。だからひっかかっている何かが一体何なのか、明確な答えを出せずにいた。
「あのさ、僕と一緒にいるより、もっと彼女と話をした方が良いんじゃないかな？」
なので、ひどく退屈なアドバイスしか出来なかった。
「つっても、そうそう電話も出来ないし、梓歩ちゃんは忙しいしなあ……」
ぶつぶつとあれこれ考え始める海老原。
「とにかく、相互理解は必要だと思うよ」

海老原の気持ち。高城さんの言葉。その両方を知ってしまった僕は、もう本音を口に出すことは出来なくなっていた。
どうしてだろう？　簡単だったはずだ。中学校時代のように「駄目だよ」「無理だよ」「止めた方が良い」と否定の言葉を並べれば、それで済んだはずだ。
でも、それは出来なかった。
このとき既に、僕は海老原のことを友達だと思ってしまっていたからかもしれない。
そして休み明け。そのことを僕自身がはっきりと自覚してしまう出来事が起こった。

帰りのホームルームも終わり、クラスのみんながそれぞれ思い

思いの行動に移り始める。僕は読み終えた本を返しに図書室へ向かおうかどうしようか思案していた。

と、教室の入り口に見知った顔が立っていた。海老原だ。

僕に気付いた海老原は、堂々と教室に入り、僕の前までやって来た。

「陽司、行こうぜ。今日は新譜持って来たから、楽しみにしてたんだ」

相変わらずの子供じみた笑顔でそう言った。

「まあ、良いけどね」

僕は苦笑いしながら席を立った。図書室は明日の昼休みにしよう。そう考えて。

教室の中には、もう人がまばらになっていた。僕はホームルームが終わってからしばらくは教室に残るようにしていた。下駄箱やら廊下やらが混雑するのが嫌だったからだ。

「やっぱさ、陽司の部屋くらい音響が良いと、CD買っても惜しくないよな」

そんなことを語る海老原に、僕は肩を並べようとして――

その視線に、気付いた。

「あの……っ！」

高城さんだ。

海老原は語り続けていて、気付かない。不味い、と思って、僕は海老原を肘で小突いた。

「んだよ……？　あ、梓歩ちゃん！」

あまりにも間の抜けた声に、僕は頭を抱えそうになった。この間抜けは、僕と高城さんが同じクラスだということすら忘れていたのだろうか？　それに、僕と高城さんの二人を天秤にかければ、どちらが重いか考えるまでもないというのに。

「梓歩ちゃん！　あー、その、今日はゆっくりなんだね？」

慌ててそう取り繕い歩み寄っても、高城さんの表情は晴れなかった。当たり前だ。彼女にしてみれば、恋人である自分を無視して、ただの友達の僕のところへと真っ直ぐ向かい、尚且つ自分の存在に気付かず出て行こうとしていたのだ。面白いはずもない。

海老原もその危うさに気付いたのか、あれこれと彼女の気を引くために言葉を並べた。が、その大半は彼女の耳を素通りしているようだった。

修羅場。そんな言葉が僕の頭に浮かんだ。

「哲くん、本当は私のことなんて、どうでも良いの？」

本の中で何度も目にした台詞。実際に耳にすると、とんでもない緊張感だ。

「いや、そうじゃなくてさ！　今日はたまたま俺のテンションがおかしくて、なんつーか、その……」

「私のこと好きだって言ってくれたのに、私よりも石田君の方が好きなの？」

妙に芝居じみた言い回しに、僕は眉根を寄せた。

「たまにしか逢いに来てくれないし、放課後はいつもいないし、お昼だって……。せっかく付き合ってるのに、不安だよ」

「だから、その、梓歩ちゃんは忙しいみたいだし、負担かけても迷惑かなって……」

聞いていられない。出来ればこのまま黙って教室を出て行きたい。実際、僕ら三人を除いた他のクラスメイトは、さっさと教室から退散してしまっていた。

「もっと私のことを考えて欲しいのに」

「考えてる！　毎日毎日眠れないくらい考えてるって！」

あまりにも嘘臭い言い分だが、それを判断する冷静さを海老原に求めるのは酷だった。

「じゃあ、どうしていつも帰りに誘ってくれないの？」

「いや、そのさ、実はそれには訳があってですね……」

訳も何も、いつも僕の部屋に入り浸ってギターががちゃがちゃうるさい音楽を聴いてるだけじゃないか。鼻歌混じりに。

「ば、バイト！　始めたんだ！」

「アルバイト……？　どうして？」

どうして。僕もそう思った。どうしてそんな嘘を吐くのだろうか。この馬鹿は。

「その、金貯めてさ、先になるかもだけど、二人で旅行とか行けたらなーって」

海老原の苦しい言い訳に、高城さんは疑わしげな顔を浮かべていた。さすがに通らないだろう、そんな出任せ。

「な！　陽司！　お前とはバイト先まで一緒に帰ってるだけだよな！」

おい！　僕に振るなよ！

そう思った途端に、高城さんの目が僕に向けられた。半分泣きそうなくらいに潤んだ、いつもよりも更に細くなった目。

このとき、僕は不意に理解してしまった。高城さんが、何を思って哲を問い詰めたのか。その訳を。

彼女は結局のところ、自分が大切で仕方ないのだ。だから、自分を大切にしてくれそうな人とは簡単に付き合うし、大切にしてくれないなら糾弾する。相手なんて誰だって良いのだろう。ただ、優しくされていればそれで構わないのだ、と。

もしかしたら、それは多分に悪意に満ちたものの捕らえ方なのかもしれない。でも、一度そう思ってしまえば、全てに合点がいった。いつかのファミレスでの会話にも、ついさっきまでの芝居じみた台詞回しにも。

僕は、海老原にそのことを伝えようと思った。この女は、ただ悲劇のヒロインを気取っているだけなんだ、と。お姫様体質の、下らない女なんだ、と。

お前のような男には、似合わないと。

「陽司」

その声で、僕は現実に引き戻された。

高城さんの、潤んだ瞳が視界に映っていた。震えていた。きっと海老原も震えている。僕の言葉ひとつ、声ひとつで、二人の関係が変わってしまうことに怯えている。

海老原が望んでいること。僕にのみ、望んでいること。それは、

誰かを傷つけることじゃなかった。
僕は溜め息を吐いて、作り笑いを浮かべた。
「そう。海老原は、高城さんのために、バイトをしてるんだよ」
僕がそう言うと、高城さんは海老原の顔を見た。ここからは見えないが、多分海老原はあらん限りの力を使って真剣な表情をしているのだろう。
「そうなの……？」
ぶんぶんと、滑稽なまでに何度も首を振り、頷いている。首がムチウチ症にならないだろうかと本気で心配になった。
「お、俺は！　いつでも梓歩ちゃんのことを大事に思ってるよ！　一番だよ！」
二番がいるのか、と突っ込まれればまた修羅場に逆戻りしてしまう言い訳も、何とか咎められずに済んだようだった。高城さんは目尻をそっと指で拭って、笑顔を浮かべた。
「ごめんね。私、少し焦ってたみたい」
「いや、良いんだよ！　秘密にしてた俺が悪いんだから！」
何とか誤魔化し通せたらしい。二人は顔を綻ばせながら、旅行の計画についてあれこれと話を始めた。
僕はただ、二人の話が終わるまで教室の出口にぼんやりと立ち尽くしていた。そして、考えていた。ひょっとしたら、僕が間違っていたのかもしれない、と。幸せそうに語り合う二人には、醜い感情の欠片すら見えない。きっと誰が見ても、理想の恋人同士に見えるだろう。
僕は、二人を傷つけるところだった。
海老原の声が、それを留めた。それが悔しかったし、同時にひどく安堵をもした。
海老原の笑い声が、廊下にまで響いていた。

自分の部屋に入ると、鞄を投げ出して、ベッドに身を投げた。海老原も、へなへなとその場に膝をついた。教室を出てから今まで、お互いに一言も口を開いていない。
「疲れた」
僕がやっとの思いでそう口にすると、海老原も同じことを口にした。「疲れた」と。
「お前のせいで、僕まで嘘吐きになった」
何がバイトだ。僕の部屋でごろごろしているだけの癖に。
「いや、俺が上手くやるから。陽司を嘘吐きにしたんじゃ、俺の気が済まない」
「どうするのさ？」
海老原は長い間考えていた。考えて考えて、答えが出たのか出ないのかはっきりしないまま、オーディオの電源を入れた。
結局のところ、この男は何も考えていないのだ。
それにしても、と僕は思った。
とっさのこととはいえ、どうしてあそこで本当のことを言わなかったのだろうか、と。わざわざ嘘を吐いてまでこの男を助ける必要はあったのだろうか。そこまでする理由が、僕にあったのだ

ろうか。
　カーペットの上に寝転んで音楽に耳を傾ける海老原。さっきまでの冴えない表情も、少しずついつもの調子に戻りつつある。全く、気楽なものだ。
「陽司、ありがとな」
「別に良いよ」
　やっぱり、僕にとってこの男は友達なのだろう。そうとしか言えなくなってしまったのだから、仕方ない。
「で、どうするのさ?」
「大丈夫だって」
　説得力のない言い分に苦笑しながらも、何とかなりそうな気がしてきたのだった。

　翌日に海老原が持ち込んだのは、アルバイトの情報誌だった。
「嘘も突き通せば本当になるだろ?」
「順番がおかしいけどね」
　要するに、「吐いた嘘は本当にしてしまおう」ということらしい。まあ、なかなか悪くない。この男にしてはマシな案だろう。
　あれこれ独り言を言いながら、ページをめくっている。そもそも、高校生でも大丈夫なところなんてそうそうあるのだろうか。
「本当に高城さんと旅行に行くつもり?」
「まあ、無理じゃないか?　梓歩ちゃんの家、いろいろ厳しいみたいだし」
「じゃあ、金稼いでどうするのさ?」
「それもちゃんと考えてある」
　妙に自信に満ちた口調で言った。目は情報誌に向けられている。表情まではうかがえない。
「遊ぶ金欲しさ、って訳じゃないから安心してくれ」
　親御さんに言っても信じてはもらえないような言い訳に、僕はとりあえず騙されておくことにした。

　CDを二度替え、麦茶の作り置きを終わらせた頃、ひとつの店が候補に上がった。
「ここ、良いと思わないか?」
　海老原が指差したのは、楽器店だった。
「専門的な知識とか必要じゃないの?」
　言いながら目を走らせると、「興味のある方、募集!」と書いてあった。それ以外は連絡先と時給、それに店の名前だけだ。実に簡素で怪しい、出来れば避けたいような求人。でも、海老原は目を輝かせてそこに赤ペンで丸印をつけた。薄く質の悪い紙が、ぐしゃぐしゃに歪むくらいに強く。
「働きながら覚えりゃ良いんだろ?　やってやるって!」
　妙にやる気を出して、鞄の中から大判の封筒を取り出した。
「それは?」
「履歴書。必要だろ?」
　ご丁寧なことに、いつ撮ったのか証明写真までも用意されてい

た。気の早い男だ。
「すぐ書いてすぐ電話して、すぐ行くから」
ガラスのテーブルの上で、ボールペンを小気味良く走らせる。意外と字が綺麗なことに少しショックを受けた。
僕はそんな海老原を放置して、アルバイト情報誌を手に取った。
「フォー・シャープ」というのが店名らしかった。良くは分からないが、とにかく高そうだ。値段も。
「今日からだって働いてやるぜ」
息巻く海老原。僕はカレンダーに目を向ける。五月十六日、火曜日。この時期にある重大なイベントを、この男は忘れている。
「よし書けた！　陽司、電話貸して！」
「あのさ、言い辛いんだけど」
僕は立ち上がり、カレンダーに指を当てた。来週の月曜日、二十二日から横に指を三日分滑らせて、
「中間テスト」
とだけ端的に告げたのだった。

結局、海老原は履歴書とアルバイト情報誌を鞄に仕舞い、電話はテスト明けにすると言った。成績やら進路やらはともかく、テストの結果次第では補修も有り得る。僕がそのことをゆっくり分かりやすく丁寧に説明すると、さすがの海老原も納得してくれた。
「一緒に勉強する？」
「いや、何とかなるだろ」
僕の仏心はあっさりと受け流され、しゃがれた雑音みたいな音楽を背景にして、僕はテスト勉強をすることになったのだった。

## 2.

僕にとっては無事に、そして僕の友達にとっては何とか安全に、中間テストは終わった。そして、海老原は「フォー・シャープ」でアルバイトを始めることになった。
「面接って、意外と簡単なんだな」
そう言いながら笑ってはいたが、どう考えてもまともな受け答えが出来たとは思えなかった。
ともかく、海老原はバイトを始めた。週に二度、月曜日と木曜日だ。おかげで僕は週に二日間は確実に穏やかな時間を約束された訳で、その点だけをとって見れば「フォー・シャープ」の店長に感謝をしたいくらいだった。

海老原が僕の部屋に出入りするようになって、だいたい一月が経った頃。この頃から僕は、海老原のことを下の名前で呼ぶようになっていた。どんな心境の変化があったのかは分からない。もしかしたら、僕が海老原のことを友達だと認めたときから、いつかはそうしようと決めていたのかもしれない。良くは覚えていないが。

「哲」

いつものように、僕の部屋に二人。それぞれに思う通りの過ごし方をしているとき。ふと気になったことを口に出してみた。文庫本から顔を上げずに。

「バイトして、お金貯めて、どうする気？」

哲はうつ伏せで歌詞カードと睨み合ったまま、うめくような声で返事をした。

「家に入れたりするの？」

「まさか」

今日のＢＧＭは、何とかというイギリスかどこかのロックバンドのものらしい。あれこれと一生懸命説明してくれたが、未知の単語は覚えるのに時間がかかるし、覚えておいても役に立ちそうもない知識だったので右から左に受け流しておいた。

「俺さ、なりたいモンがあるんだよ」

ぼそぼそと、ギターの音に負けそうなほど弱々しい声。相変わらず、英語ばかりの歌詞カードと奮戦しているのだろう。その努力の何分の一かを勉強に向ければ、補修すれすれなんていう綱渡りなテスト結果は残さなかったに違いないのに。

「ギタリストになりたいんだ。ジミー・ペイジとか、ジミ・ヘンドリックスみたいなさ。今は確かに古臭く聴こえるかもしれないけど、ああいう人たちが今の音楽の根っこを作ったんだぜ？　そういうの、憧れないか？」

「どうだろうね」

そもそも僕はジミーなんちゃらを知らなかった。というか、どうして引き合いに出した二人が二人とも「ジミー」なのかも分からなかった。

「俺がいろんな音楽聴いてるのもさ、いつかギター一本で出来ること全部やりたいからなんだ。そのためには、今ある曲がどんなのか覚えなくちゃならないだろ？」

「つまり、」と、僕はここで本から顔を上げて哲の方を向いた。

「つまり、哲はバイトをしてギターを買って、ギタリストになるために練習したいってこと？」

「そうなるな」

「へえ」

僕は本に視線を戻した。というのも、哲は変わらず歌詞カードに噛り付いていたからだ。そこまで言うなら邪魔はしない。それに、何かしら目標があるなら、他人がどうこう口を挟む問題でもない。そう思ったからだった。

「買うギターも決めてある。昨日、店で選んだんだ」

店、というのはバイト先でもある「フォー・シャープ」のことだろう。仕事中にそんなことをしていたのかこの男は。

「で、そのこと高城さんには話したの？」

ここで、哲の体が少し固まったのが分かった。言ってないな。直感的に僕は分かってしまった。全く、これじゃあいつかの二の舞じゃないか。

哲はしばらく黙り込んでから、体を起こした。
「やっぱさ、言わないと不味いかな？」
「不味いだろうね」
何度も似たようなことでフォローをするのは、僕だってごめんだ。
「でもよ、こういう話って女の子は嫌がらないかな？」
「こういう、って？」
「夢とか、将来とか、そういう不確かな話だよ。一流企業に入ってサラリーマンになるって方が、まだ受けが良くないか？」
考えてみた。でも、分からなかった。
そもそも、僕は誰かにそういった漠然とした将来の話をされたのも初めての経験だったし、僕自身将来に対して明確な何かを持っていた訳でもない。それに、女の子の好みなんて分かるはずもなかった。
「思う通りにしたら良いじゃないか」
言った後、まるで父さんのようだな、と思った。僕の父さんは時折、そういう突き放すような言い方をしたからだ。
哲は泥の中を泳ぐような鈍い仕草でオーディオの前まで行き、CDを替えた。流れ出したのは、ギターが妙に寂しそうに鳴っている曲だった。静かで、気分が沈んで行く感じだ。
「どうすっかなあ……」
ちらりと横目で伺うと、哲はあぐらをかいたまま首を垂れていた。背中が哀愁を漂わせている。

「なるんだろう？　ギタリストに」
僕がそう言うと、哲は立ち上がった。
「なる！」
曲に歌が入り、泣きそうな声で誰かが何かを唄っていた。
哲はその晩、高城さんに電話をしたという。でも結局、言い出すきっかけが見つけられなかったらしい。多分嘘だ。根性がなかっただけだろうと思っている。
そんな風にして哲はアルバイトを始めたのだけれど、相変わらず僕の部屋に入り浸り続けていた。
そして、予想していた通りに高城さんがまた哲を問い詰めたのだった。

哲に拝まれ、連れて行かれた先はいつかと同じファミレスだった。中に入り、待ち合わせていた高城さんを探し、二人で席に着く。
「ご、ごめんね梓歩ちゃん。ちょっと陽司と約束があって……」
馬鹿、と僕は思った。ただでさえ哲の隣に僕がいることを快く思っていないはずなのに、今の台詞は明らかに失言だ。高城さんの細い目が、更に細く引き絞られた。
「ちゃんと説明してくれるよね？」
鳥肌が立つくらい迫力のある言葉に、哲が背筋を真っ直ぐに伸ばした。僕でさえ、居住まいを正したほどだった。高城さんがこれほど感情を表に出すのを、僕は初めて見た。

「えーと、つまりですね……」

何故か敬語になりながら、哲は落ち着かなく視線をさ迷わせている。気持ちは分かる。情けなくて惨めで格好悪くても、気持ちは良く分かる。僕が当事者だったら逃げ出してしまいたいくらいだ。

今回高城さんが腹を立てているのは、アルバイトで忙しいからと言いながら、相変わらず僕の部屋に足しげく通っているのが発覚してしまったからだ。それは事前に聞かされていた。そもそもは、哲の口の軽さが起因しているのだが。

自業自得。そう思ったが、こうして連れ出されれば他人事だと笑えはしないのだった。

「勉強をですね、している訳でして」

蚊の泣くような細い声で、哲は苦しい言い訳を搾り出した。終わった、と僕は半ば諦めかけた。しかし、意外なことに高城さんはこれに食いついてきた。

「そういえば、石田君って成績すごく良かったよね？」

「え？　ああ、いや、それほどでもなかったような……」

突然僕に振られたので、柄にもなく慌ててしまった。

「そう！　こいつ成績だけは良いからさ、分からないとこ教えてもらってるんだ！　実は中間テストのことで親にみっちり怒られちゃってさ！」

後半は本当のことだった。

「期末で平均以上取らないと、バイトも辞めなくちゃならなくてさ！　だから、ほら、頑張ろうかなーって……ね？」

哲が苦しい言い訳をしている間も、高城さんの目は僕をじっと見据えていた。僕はこの目が苦手だった。というのも、彼女は常に誰かに何かを期待しているような節があったからだ。僕にまで何かを期待されても、応えられる保証はどこにもない。

哲が空気に押し潰されたように口を閉じたのと、高城さんがゆっくり口を開いたのが同時だった。

「石田君、今のこと、本当？」

ひとつひとつの言葉を区切るように、はっきりと、僕に問いかけてきた。目を逸らさないままに。

喉が音を立てて鳴った。十六年の人生で、最大のプレッシャーだった。

僕は何とか息を吸い込んで、早鐘を打つ心臓を黙らせるように、一言だけ搾り出した。

「……はい」

もしも神様がいるなら、こんな試練をこの先どれだけ用意しているのだろう。そんな人生の不安を宗教的に考えてしまえるくらいの間を置いて、高城さんは大きく頷いた。

「それなら、今回は許してあげる」

僕と哲は顔を見合わせた。哲の顔が滲んで良く見えなかった。ありがとう神様。僕はまだ強く生きていけます。そう思った。

「ただし」

思った瞬間、僕らの時間は止まった。

高城さんがカップを口に運び、ソーサーに戻す。コマ送りのようにその動作が目に焼きついた。
「哲くんは、毎週日曜日は絶対に私とデートすること。破ったら、もう知りません」
おや、と僕は思った。彼女のこういった言い回しは、初めて聞いたからだ。相変わらず自分を大切にする高城さんだったが、ほんの少し変わろうとしているのかもしれない。そんな気がした。
そして、彼女を少しずつ変えようとしているのは、きっと哲なのだと、何となく分かった。
「する！　絶対するから！　予定なんて入れないから！」
その張本人は、滑稽なまでに首を縦に振っていた。壊れたおもちゃのように、何度も。

高城さんと別れて、僕らはいつも通り僕の部屋へと逃げ込んだ。
「また嘘吐きになった」
恨めしい気持ちで僕がそう言うと、哲は気にもせず、
「嘘から出た真って、便利な言葉だよな」
と真剣な顔で言った。その思想は危険だと、本気で思った。
ともあれ、僕らはまた嘘を吐いた。
例えばあそこで本当のことを包み隠さずに話したとして、誰が良い気分になっただろう。些細な満足感は得られたかもしれない。でも、僕は友達をひとり失うことになったかもしれない。いや、本当に友達のことを思うなら、嘘なんて吐くべきではなかったのかもしれない。分からない。分からなかったが、僕はまた嘘を吐いた。でも、悪い気分じゃなかった。
「ギタリストが云々って話、もうしたの？」
「まだしてない」
結局、彼女にそのことを話すのは、随分先のことになるのだった。

とにかく、哲が僕の部屋で真面目に勉強をするようになった。
哲は、驚くほど真剣にノートにペンを走らせていた。分からないことは積極的に僕に質問をし、やがてその回数も減っていった。参考書や問題集を持っていなかった哲は、僕の物を借りてまで勉強を続けた。手を休める度に、何故か細かく震えて。良く分かる。多分、高城さんが怖かったのだろう。僕だってそうだった。
物静かなお嬢様のお怒りに、僕ら二人は刃の上に立つような心境でひたすら勉強を続けたのだった。

そんな毎日の中でも、哲は変わらず月曜と木曜にはバイトに行ったし、日曜日には高城さんとのデートを忘れることはなかった。律儀な男だ。

七月に入り、長い雨の季節が本格的に始まった頃。哲は何とか平均を上回る学力を身につけていた。当時の僕は、ほんの少し感動したものだった。人間やれば出来ると、本心からそう思った。

そして期末テスト。結果が発表され、学校の全員に結果をまとめた小さな紙片が配られた。

放課後の教室では、それぞれに紙片を持ち寄ってあれこれと話がされていた。あれが良かった、これが悪かった。勝った、負けた。そんな話だ。

僕は下らないと思いながらも、誇らしい気持ちを抑えられなかった。総合ではまあまあだったが、化学と数学の二教科では首位を獲得していたからだ。

「陽司！　どうだった？」

僕に声をかけてくるのは、哲以外にいない。

「僕のことより、哲はどうだったのさ？」

哲は不敵に笑い、堂々と僕の机の上に紙片を叩き付けた。

「どうよ？」

悪くなかった。というよりも、かなり良かった。現代文と英語が特に抜きん出ていて、もう少しで一桁の順位に食い込めそうな位置だった。苦手だった化学だって、きっちり平均点を上回っている。上出来だった。

「哲くん、そんなに良かったの？」

その声に、僕ら二人は思わず身を強張らせた。奴が来た。小さく心の中でそう呟いた。

「あ、すごいね。私より良いのもある」

「え、本当に？　俺、頑張っちゃった？」

「頑張った頑張った。これも、石田君のおかげだよね」

高城さんの穏やかモードの対応に、僕も哲も緊張を解いて会話を続けた。

「いや、でも哲は頑張ったよ。こんなに出来るなら、中間のときもやっておけば良かったのに」

「それがさ、俺が一番驚いてたりしてな！」

嬉しそうに声を上げて笑う哲に、高城さんが優しい視線を向けていた。

「で、陽司は？」

促されて、僕は結果の記された紙を哲に手渡した。と、哲の動きが固まった。

「……なんじゃこりゃ」

「どれ？　わ、すごいね……」

まるで珍獣を見るように、紙片と僕とを交互に見ている。それも、二人して、だ。

「総合一桁って、どういうことだよ……？」

「石田君って、こんなに頭良かったんだ？」

何故か、二人が半歩ほど遠ざかったような気がした。

「ここまで良いと、嫌味としか思えんわな。どう思う梓歩ちゃん？」

「何でこの学校に来たんだろうね」

尚もぶつぶつと言い募る二人に、僕は盛大な溜め息を返してから、紙切れを奪い返した。

「努力の成果だよ」
恐怖は時に、人間を努力へと導く。それがこのときの教訓だった。

その日は三人でいつものファミレスに行き、ほんの少し和やかな雰囲気で時間を過ごした。開放感と高揚感が、僕らの間に親密な空気を作り出してくれたのかもしれない。
それに、夏休みが近いのも理由のひとつだったと思う。

期末テスト絡みのあれこれも終わり、球技大会というささやかなイベントも無事終わり、夏休みまで指折り数えるくらいになった頃、哲が真剣な表情で僕に言って来た。
「いつになってもギターが買えそうにない」
知らない。そんなことは関係ない。久し振りに頭を抱えたくなりながら、僕は角の立たない言い回しを考えていた。
「そう焦ることもないんじゃない？」
「週に二日、一度に四時間程度のバイトじゃあ給料なんて知れてるんだよ！」
「声が大きいよ……」
興奮すると声が大きくなるのは、哲の悪癖の最たるものだと思う。また声が異常に良く通るのも問題だ。未だに僕の両親から何一つ言われないのが不思議なほどに。
哲がこんなことを言い出したのにも理由がある。目星をつけていたギターが、売れてしまったらしいのだ。良いものに目をつけるのは、何も哲ひとりじゃないということだろう。それに、売り物を売るのは何らおかしいことじゃない。店としては当前の姿だ。けれど、自らレジ打ちをしなければならなかった哲の心情を考えれば、フォローのひとつもしてやりたくなるというものだ。
「学生なんだから、仕方ないだろ？」
僕らは勉強が本分で、高い買い物をするために学校に通っている訳じゃない。
「俺のレスポール……。ワインレッドのレスポール……」
「鬱陶しいなあ……」
めそめそとしている男なんて、見たくない。
「夏休みに頑張れば良いじゃないか」
「店長に相談したら、他の奴が先に言って来たからって」
「出遅れたのね」
まあ、こういうのは早い者勝ちでも仕方ないのだろう。
「何か探すしかないんじゃないかな？　それなりのバイトを」
「電話しまくったけど、夏休みの間だけって言うと電話切られるんだ」
「それはそうだろうね」
全く、正直というか不器用というか。
「それに、週に三日は梓歩ちゃんと逢う約束してるし」
「ああ、うん。頑張って」
それに関しては、僕は何も言うまい。
あれこれと話し合っている内に、気がつけば夕暮れも過ぎてい

た。時計を見ると、そろそろ夕食の時間だ。
「哲、ご飯食べてく？」
この頃になると、哲はなし崩し的に夜遅くまで僕の部屋に居座る日が増えてきていた。お互いに慣れてきたのもあるし、僕の両親が哲のことを気に入ったのも理由のひとつだった。あまりに遅くなった日は、父さんが車で送ることもあったくらいだ。
「いや、今日はいいわ。本屋寄って求人情報誌買って帰る」
哲が重くなりすぎた腰を持ち上げたとき、部屋の扉が開いた。父さんだった。
「お邪魔してます」と哲が挨拶をする。見た目に似合わず、こういう礼儀だけはちゃんとしているのが哲の数少ない美点だった。
「何だ、帰るのか？　飯食って行けよ」
「や、今日はちょっと……」
語尾を濁す哲に、父さんが訝しげな表情を浮かべた。
「哲がね、バイト探してるんだってさ。夏休みの間だけの」
「そうっス。で、求人情報誌買って帰ろうかなって」
力なく笑う哲。父さんは右手で顎の辺りを擦りながら、少し考えて、言った。
「それなら、俺の仕事手伝うか？　それなりの給料は払えると思うんだが」
「ホントっスか！」
僕は、哲の安直さに溜め息が出た。父さんがどういう仕事をしていて、どんなことを手伝わされるのか、全く考えていないのだ。
「丁度現場が立て込んでて、手伝いを借りようとしてたんだ。丁度良い、陽司も手伝え」
「僕も？」
突然の命令に、驚きが隠せなかった。というよりも、嫌だという言葉が出せなかった。
「お前が一緒の方が、哲君も気楽だろう？　それに、最近全然手伝ってくれないじゃないか。たまには体を動かせよ」
「い、いやだ。夏休みは図書館に通って本を読むんだ」
腰が引けるのを隠すように、大きく手を振って拒否をした。確かに中学校の頃は時々手伝ってはいたが、完全に強制だったのだ。望んで手伝ったことなんて一度もない。臨時でお小遣いが貰えるのは、まあ、嬉しかったが。
「陽司、一緒にやるよな！　で、親父さん。何を手伝うんっスか？」
今の父さんの格好は、明らかに仕事帰りの作業着のままで。妙に裾が広くなっているスボンに、所々ペンキのようなものがついたシャツ。日焼けした体、太い腕、指、厚い掌。
「簡単だよ。家の、内装だ」
要するに、僕の父さんは職人で一人親方なのだった。

後先考えない哲の行動のおかげで、僕まで父さんの仕事を手伝うはめになってしまった。それも、夏休みの間ずっとだ。
哲は喜んでいたし、体を動かす仕事は向いているようだった。でも僕は違う。そもそも体を動かすのが得意だったら、学校でも

部活のひとつくらい入っている。その辺りを父さんも哲も少しは思い遣って欲しいものだった。

真夏の暑い空の下、ろくに換気もされない出来立ての家の中で、壁紙を貼ったり天井にボードを貼ったり。おかげで夏休みが始まってから数日、僕は筋肉痛で寝起きするのも辛いほどだった。

哲は週に三日、午前中だけ高城さんと逢い、「フォー・シャープ」でのバイトも今まで通りに続けた。それでいて父さんの仕事をしっかりと手伝えるのだから、大したものだった。

「運動すれば少しは背が伸びるかもしれないだろ？」

どうやら身長のことを気にしているらしかった。

「なら、毎日牛乳でも飲めば良いよ」

捨て鉢にそう言い捨てると、哲はまたぶつぶつと何かを考えていた。実践するのだろう。

とはいえ、筋肉痛も治り、夏休みも半ばに差し掛かれば仕事にも慣れるもので。昼間は現場で父さんを手伝い、夜は勉強をするという生活サイクルが出来上がっていた。

Ｔシャツの形の日焼け後が出来た頃、長かった夏休みも終わりに近づいてきていた。

父さんからのバイト代は、思っていた以上だった。簡単に使うのが躊躇われる額だ。

「ま、おかげで現場も早く終わったしな」

そう笑う父さんだったが、僕は何だか申し訳ないような気がしていた。

そもそも、僕らはまだ学生なのだ。基本的な体力も、技術も、本職には程遠い。それなのに、こうもしっかりと賃金を貰って良いものだろうか。

僕がそう言うと、父さんは更に笑って、こう言った。

「そう思うなら、次はもっと気合入れてやるんだな」

でももう手伝うのはごめんだと思った。

そして、僕の手元にバイト代が入れば、当然同じ額が哲の手元にも届く訳で。

「陽司！　ギター買いに行こうぜ！」

満面の笑みを浮かべてそう言う哲に、僕は苦笑しながら頷いたのだった。

八月三十一日。夏休みの最終日。僕と哲は、二人で「フォー・シャープ」を訪れた。

「そういや、陽司は初めてか？」

「そうだね。ここにあるのは知ってたけど」

駅前通りの雑居ビルの二階に「フォー・シャープ」はあった。それなりに広いフロアに、所狭しと楽器が並んでいる。金色に光る管楽器に、ドラムのセット。たくさんのギターと、良く分からない小箱のような物。ガラスケースに入っているのは、どれも値札のゼロがひとつ多かった。楽譜や入門書、それにＣＤ。

「もう決めてあるんだ。店長に取り置きしてもらってある」

スキップでも始めそうなくらい軽やかな足取りで、哲が棚の間を進む。僕は黙って後ろをついて行った。

哲が足を止めたのは、店の一番奥にあるガラスケースの前だった。

「これ！　この真っ赤なＳＧ！」

哲が指差しているのは、まるで二本の曲がった角が生えているようなギターだった。言った通り、色は真っ赤だ。他の物と比べても、派手な色合いなのは僕でも分かる。

「てんちょー！」

哲は呼びなれた口調で店長を呼びながら、奥へと消えて行った。残された僕は仕方なくその場で辺りを見回すことにした。

まるで知らない世界に迷い込んだみたいだった。僕が読書や勉強で溜め込んだ知識が、全く通用しない世界。ここにいる限り僕はただの素人の愚か者で、無知で、迷子のようなものなのだと思った。

だから、それが心地良かった。

ギター一本取っても、それぞれ種類がある。色、形、弦の本数、メーカー。どうやらそれぞれに名前がついているみたいだ。哲がさっき言っていた「ＳＧ」というのもそのひとつらしい。以前は確か、「レスポール」とか言っていた。

「陽司！　鍵借りてきたぜ！」

哲は鍵束を誇らしげに掲げながら、小走りで戻って来た。というか、仕事中でもないのに、勝手に開けて出して良いのだろうか。

ガラスの扉をスライドさせる。ガラスが擦れる独特の音が耳についた。哲はお目当てのギターに手をかけ、まずは貼り付けてあった「売約済」の札を剥がした。

丁寧に、慎重に握り締め、抱きかかえるようにして棚から取り出した。

「……最高だ！」

値札を見て、僕は驚いた。父さんがくれたバイト代が、ほとんど全部消えてしまう金額だった。

「奥でケースに入れてくるから、ちょっと待っててくれよ！」

店中に響きそうなくらいの声で、哲は喜んでいた。それを見て、何だか僕まで嬉しくなってしまった。長く辛かった夏休みの疲れが、一気に吹き飛んだ気がした。

ガラスケースに再び鍵をした哲は、ギターを抱いて駆けて行った。

その背中を見て、僕は何だか羨ましくなったのだった。

その日、哲は夜遅くまでギターを弾いていた。一冊だけ買った教本と格闘しながら。もちろん、僕の部屋で。

「やっぱ、練習しなきゃな」

最初から上手くいくはずもなく、哲の出す音は情けないものだった。でも、とても楽しそうにギターを抱いていた。

夜。僕の部屋でギターを弾く哲。僕は微笑ましく思いながら、本を読み続けた。

そして僕らの夏休みは終わった。

余談になるが、哲は夏休みの宿題を一切やっていなかった。

それはそうだろう。「フォー・シャープ」でのバイトと高城さんとのデート、それに父さんの仕事の手伝いまでやっていては、時間なんて足りやしない。

そんな訳で、哲は新学期早々先生に怒られ、僕の部屋でギターに手が伸びそうなのを堪えながら、泣く泣く宿題を処理する作業に追われることになったのだった。

## 3.

「バンドを組む？」

あまりにも唐突で性急な宣言に、僕は改めて哲の浅はかさを噛み締めることになった。

二学期が始まって、まだ数日。進路診断という名目のテストも終わり、哲もやっと夏休みの宿題から解放された日。哲は実際、まだ数時間しかギターを抱いていなかった。

「実は、もうメンバーも集めてあるんだ。それに、申し込みもしておいた」

「申し込みって、文化祭の？」

哲はギターを抱き締めながら、誇らしげにそう言った。蛮勇はいつも誇らしく見える。

「まだ一ヶ月近くあるし、何とかなるだろ」

それがどれほど無謀なことなのか、僕にすら理解出来た。

「でも確か、僕らの学校には軽音楽部があったよね？」

文化祭といえば、文科系の部活の、年に一度の晴れ舞台。その中に素人の哲が乱入して、どうにかなるものなのだろうか？

「あんな奴らはクソだ」

吐き捨てるようにそう言った。

詳しく聞くと、どうも入学当初の仮入部期間に顔を出して、手酷く馬鹿にされたらしい。初耳だった。

「音楽やるのに、身長だの顔だのが関係あるかってんだ」

忌々しげに嫌悪感をあらわにする哲に、僕は何も言葉をかけなかった。

「今日だってそうだ。生徒会室に申請に行ったら、たまたま顔合わせちまってよ。下らねえこと、また言われた」

クソだ、と繰り返した。

「とにかく、練習することだね」

僕は一歩引いた意見を言って、本を手に取った。

「馬鹿にされたって、下らないこと言われたって、良い演奏が出来なかったら同じだよ」

「まあ、そうだよな」

哲はしばらくぶつぶつと言っていたが、伸び始めた前髪を雑に

かき上げてから、また真剣にギターと向き合った。
ＣＤをかけ、楽譜を見て、ギターを弾いて、またＣＤをかける。月末の文化祭の、たった三曲の演奏。毎日ギターや他の楽器を演奏している軽音楽部の連中にとってみれば、容易いことなのかもしれない。でも、哲にとっては違う。数日前にギターを初めて買って、何もかもをこれから始めるところなのだ。
「ちっきしょ……」
苛立ちを噛み締めるように吐き出す小さな言葉には、焦りも混じっていた。

文化祭まで一ヶ月。それでも授業は通常通りにある訳で。
夏休み直後のテストの結果が配られ、教室のあちこちでいつも通りの悲喜こもごもが繰り返されていた。
僕の結果は、前回の期末テストより少し悪くなっていた。考えてみれば当たり前のことかもしれない。あれだけ肉体労働に従事したんだ。勉強が疎かになっても仕方ないじゃないか。
でも、悔しかった。
同じように、哲も成績を崩していた。そりゃあもう、酷いものだった。いくら今回の結果は成績に反映されないとはいえ、危機感を持ってもらいたいほどだった。
それでも哲は気にせず、僕の部屋でギターを練習し続けていた。いつになく真剣に。
そして、そんな哲を横目で見ながら、僕は胸にヤスリを押し付けられたような感覚を味わっていたのだった。

二学期が始まって二週間が経った頃、哲はまた高城さんを怒らせた。三度目だった。
帰りのホームルームが終わってすぐ、僕は借りていた本を返しに図書室へ向かった。そして返却手続きを済ませ、代わりに三冊を見繕って、教室へと戻った。月曜日は哲がバイトなので、ゆっくりと本を読むことが出来る。軽い足取りで教室へと踏み込むと、見知った二人が向き合って立っていた。触れれば切れそうなほど張り詰めた空気に、体が硬直してしまった。
高城さんと、哲だった。
例によって例の如く。そんな言葉が頭に浮かんだ。どうやら哲は定期的に彼女を怒らせてしまう星の下に生まれついたようだ。哀れだった。
うなだれた哲は、ぼそぼそと何かを抗弁しているが、目は常に高城さんの顔色を伺っている。無様だった。
高城さんの表情は、僕からは見えない。見えなくて助かった、と思った。情けないことだが。
「分かった。じゃあ、これからは全部石田先生に教えてもらえば？」
「あ、いや、そうじゃなくて、その……」
高城さんは哲の頬を思い切り叩き、教室を飛び出した。ちゃん

と鞄を持って。残された哲は、張られた頬を押さえ、がっくりと肩を落としていた。修羅場も、一応は終わりを告げたようだった。

「それで、」と僕は溜め息を吐いて「今回の原因は？」と問いかけた。

哲は顔を伏せたまま、弱々しく「成績のことと、ギターのこと」と呟いた。

「とにかく、バイトに行ったら？」

時計の針は、とっくに遅刻だと告げていた。

翌日、哲は僕の部屋に顔を出した。懲りない男だ。

「成績落としたことでちょっと怒られたんだけど、夏休みのバイトでギター買ったって言ったら強めに怒られた。で、バンド組むって言ったら激しく怒られた」

「それは哲が悪いと思うよ。どうせ、ちゃんと話してなかったんでしょ？」

そういう部分が彼女を怒らせるのだということを、哲は理解出来ずにいた。怒らせるというよりも、寂しいと思わせる、と言った方が正しいのかもしれない。とにかく、僕はそれを上手く哲に説明することが出来ていなかった。不器用なのはお互い様だ。

「まだ続きがある。梓歩ちゃんの友達のお兄さんが、バンド組んでるらしいんだ。で、その人たちに教えてもらえばって言われた」

「良い話じゃないか」

誰かに教えてもらえるなら、それだけ上達が早くなるというものだ。少なくとも僕の部屋でひとり、がちゃがちゃやっているよりはずっと良い。

「それを断ったら、修羅のように怒られた」

「馬鹿……」

思わず頭を抱えてしまった。久し振りの絶望感だった。

「一応、昨夜電話でフォローしといたんだけど、やっぱりまだ怒ってた」

「当たり前じゃないか……」

高城さんとしては、最大限譲歩した形だったはずだ。哲がいつものように黙ってひとりであれこれ進めるのを許容して、尚且つその手助けをしようとまで申し出た。にも関わらず、哲はあっさりと断ったのだ。腹を立てないはずはない。

「でもさ、おかしくないか？　梓歩ちゃん本人が教えてくれるんなら分かるけど、梓歩ちゃんの友達のお兄さんだぜ？　全くの他人じゃないか」

「教えてもらえるなら、別に良いだろう？」

「大丈夫だよ。独学でも何とかなるから」

その自信の根拠はどこにあるのか、実に興味深かった。

「それに、俺には先生がついてるからな」

不敵に笑う哲が指差したのは、僕。

「よろしく頼むぜ、石田先生」

「帰れ」

要するに、哲は僕に対して過剰に期待しているだけだったのだ。

でも、結局のところ哲の稚拙な音楽活動に関して、僕が手助け出来ることは何一つなかった。それに、哲は僕に対して助けを求めたりもしなかった。空いた時間に僕の部屋でギターを鳴らし、音楽を聴いていただけだ。

それでも哲は着実に上達していたし、ギターを抱いている姿もそれなりに様になるようになっていた。

この頃、哲は僕を時折「先生」だの「師匠」だのと呼んでいた。もちろん冗談で、だ。僕はまともに取り合わなかったし、いちいち訂正や否定をするのも面倒だったので、そのまま好きに言わせておいた。

そして、それが問題を孕んでいたなんてことに、気付きもしなかった。

文化祭が予定の日程を消化した。

哲と他三人で組んだバンドのステージは、それほど悪くはなかった。僕は気まぐれで見に行っただけだったが、楽しみにしていた人も少なからずいたようだった。

「次はライブハウスでやりたいな」

ギターを背負って坂道を下る哲は、そんなことを言っていた。

衣替えも終わり、空が高く遠くなり、風が強さを増してきた頃。僕らの学校にもたくさんの出来事があった。教育実習生がやって来たり、生徒会役員投票があったり、中間テストがあったり、だ。

哲と高城さんは、妙に上手くいっていた。繊細で穏やかな高城さんに、大雑把で大味な哲が良くマッチしていた、というところだろうか。この頃には哲の身長も伸びていて、僕と大差ないくらいにまでなっていた。遅い成長期、というやつだろう。見た目でも、二人はお似合いになっていた。

中間テストに関しては、僕らはひたすら努力した。努力した結果は、まあまあ実ったと言って良いと思う。僕は総合で五本の指に入ったし、哲は文系科目で一桁の順位を獲得した。英語に至っては、学年でたったひとり満点だった。

「いつも洋楽ばっか聴いてるからな。何となく覚えちゃったよ」

そんなことを軽々しく言っていたが、実際そこまで簡単なものじゃなかったのを、僕は隣で見ていた。知恵熱を出す寸前までアルファベットと戦っていたのを、僕は知っている。

そんな訳で、僕と哲のコンビは、先生たちの間でそれなりの評価を獲得するようになっていた。哲は相変わらずバイトと音楽漬け。僕は読書漬けの毎日だったが。

「石田も、生徒会役員になってみないか？　補佐だったら信任投票とかいらんぞ？」

担任の高橋先生にそう言われたが、僕は嫌だった。本を読む時間がこれ以上減るのはごめんだったし、何より、哲の相手をするので手一杯だったからだ。

「成績だけ良い僕より、他に適任がいると思いますよ」

当たり障りのない対応が出来るようになっただけ、僕も成長していたらしい。

哲は文化祭の後に言った通り、ライブを決めていた。メンバーは同じ。場所は、学校近くの小さなライブハウス兼貸しスタジオで。

前の晩、哲は遅くまで僕の部屋でギターを抱いていた。今回の曲数は、五曲。

「明日は対バンだけど、次はソロでやりたいよな」

哲は上達している。それは良く分かった。でも、どうしてだろう？　僕はそれが妙に寂しかったのを覚えている。

部屋のスピーカーを通して、哲の弾くギターの音が響いていた。

ライブの日の朝。哲は僕の部屋に顔を出した。

「やっぱ、落ち着かなくてさ。少し練習させてくれよ」

断る理由もなかったので、承諾した。

通しで一度、それから気になる箇所を何度か。そして、曲ごとに何度か。いつもは座ったままギターを抱いている哲が、ストラップで肩からギターを提げて、立ったまま演奏していた。部屋のスピーカーからではなく、持ち込んできたアンプから音を出して。

「このVOXのアンプ、良い音出すだろ？　持ち運べるサイズにしてはさ」

正直、僕には違いが良く分からなかった。

「よし、こんなもんか」

満足そうに頷いた哲は、ギターをスタンドに置き、僕のベッドに寝転がった。

「時間、大丈夫なの？」

「昼に集まって、みんなで飯食って、それからスタジオでリハーサル。大丈夫だよ」

何となく窓の外に視線を向けると、空はとても澄んでいた。良い天気だ。たまには散歩に出るのも悪くないかもしれない。

「にしても、陽司。本当に来ないのか？」

「言っただろ？　夕方からちょっとした用があるんだよ」

嘘だった。

「梓歩ちゃんも今日は用事があるって言うし。何だか身が入らねえなあ」

多分、高城さんも嘘を吐いている。でも、その気持ちは良く分かった。

「ま、学校の連中も結構来てくれるみたいだし、それだけでも上等か」

哲のバンドは、学校で結構な知名度を獲得していた。軽音楽部よりも上手だった、と。

哲が有名になるほど、その恋人である高城さんも有名になり、いつも一緒にいる僕まで名前が知れ渡ってしまった。嬉しくはなかった。哲は哲で、僕は僕だからだ。

「次は、どの曲やるかな」

「自分で作曲とか、しないの？」

「まだまだ早いだろ。もうしばらくは、コピーバンドだよ」
哲はベッドに横になったまま、あれこれと今後の予定を並べて聞かせてくれた。でも、そのほとんどが耳に入らなかった。
高城さんも、こんな気持ちでいるのだろうか。何となく、そんなことを考えてしまった。

昼前になり、哲がギターケースを背負って家を出て行った。
僕は文庫本をジャケットのポケットに突っ込んで、駅前通りへと足を運んだ。特に予定なんてなかった。ただ、部屋にいたくなかっただけだ。
おかしな感覚だった。空は晴れているし、珍しく風もない。薄手のジャケットでも汗ばむくらいの陽気。それなのに、足取りが重い。
僕はいつもは入らない喫茶店に入り、いつもは飲まないコーヒーを飲んだ。たっぷり時間をかけて一杯のコーヒーを飲み干し、文庫本を一冊読み終えた頃には、もう日は落ちかけていた。
丁度、哲がステージに立つ時間だった。

週明けの教室に足を踏み入れると、いつもよりも喧騒に溢れていて驚いた。
「お、師匠！　待ってたぜ！」
僕の机の上で、哲が手を振っていた。人の机の上に座るとは、なかなか無礼な男だ。
「朝から何の騒ぎ？」
周りに集まっていたクラスメイトの間をすり抜け、哲を机から落とし、鞄をかけて椅子に座った。
「ライブさ、大成功だよ！　いやもう、ホントに石田先生のおかげですってば！」
いつものおちゃらけ振りに輪をかけてはしゃぐ哲に、派手に溜め息を吐いておいた。
「次はソロでライブ組むから、暇な奴は来てくれよ！」
相変わらずの良く通る声で、哲が教室中に呼びかけた。歓声が上がり、哲は上機嫌で教室を出て行った。
「大変だね、高城さんも」
目に付いた哲の恋人に声をかけると、彼女は浮かない苦笑で僕に応えてくれた。
本当に大変だと、しみじみそう思った。

この朝の出来事を、僕は「大変だね」の一言で済ませるべきではなかった。
そう気付いたのは、数日後のことだ。

木曜日の放課後、僕は玄関で数人の上級生たちに囲まれていた。
「少し、付き合ってくれよ。な、師匠？」
悪意に満ちた台詞だった。全員が全員いやらしい笑いを浮かべ、僕を逃がさないように取り囲んでいる。

つまりは、そういうことだった。

僕は大人しく言われるままに「付き合う」しかなかった。逃げ出すタイミングはあったが、逃げ出す理由がなかったからだ。そもそも、こうして取り囲まれる理由すら分からない。分からないから、逃げない。それがこのときの僕の、最大限の意地だった。

馬鹿な話だ。逃げるべきだったのだ。そうすれば、殴られることもなかったのだから。

僕は校舎の裏側の、ちょっとしたデッドスペースに連れて行かれ、急に殴られた。口の中に血の味が広がったが、どこをどう殴られたのかは、麻痺して全く分からなかった。

「弟子のやんちゃの責任は、師匠が取ってくれるよなあ？」

腹を蹴り上げられ、転ばされ、肩を踏みつけられた。顔を上げることすら出来なかった。

「あの海老原ってガキ、最近ちょっと調子乗ってるしな。お前の次はあいつだよ」

今日が木曜日で良かった。哲がバイトでいなくて良かった。哲の手はギターを弾くための手だ。こんな下らないことで怪我でもしたら、今までの苦労が全部無駄になる。

僕は体を丸め、頭を守りながら、上級生たちのストンピングに耐えていた。衝撃が頭を揺らし、目眩と吐き気と、何故か寒気が体を襲っていた。

「おい、何か言えよ！」

サッカーボールのように蹴り飛ばされ、僕は胃の中のものを戻してしまった。痛みで麻痺した体に、酸っぱい匂いが堪えた。涙で目の前が滲んで、見えなかった。

「お前のせいで海老原が調子乗ってんだろうがよ！　聞いてんのかよ！」

背中を踏まれ、息が詰まった。苦しくて転げ回りたかったが、その力も出なかった。

上級生たちは、あれこれと僕に下卑た言葉を浴びせかけた。時々、思い出したように足蹴にしながら。おかげで僕は意識を失うことも、何かを言い返すことも出来なかった。

でも、考えていた。思っていた。

やっぱり、哲は何も間違っちゃいなかった。

こいつらは、軽音楽部の連中は、クソだ。

哲は頑張っていた。努力していた。真っ直ぐだった。好きな人にもちゃんと好きと気持ちをぶつけた。それが実ったのは確かに幸運かもしれない。でも、哲は逃げなかった。バイトを始めたのは成り行きだったかもしれない。でも、あいつはちゃんとやり通した。やり通してギターを買った。ギターを買ったのに、それでもバイトは続けている。投げ出したりはしなかった。

背の低いことを気にして、毎日牛乳を飲んでいた。僕の家からの帰り道、いつもランニングをして体を鍛えていた。少しでも自分の理想に近づくために。少しでも、自分を誇れるようになるために、だ。

ふざけるな、と本心から思った。こいつらはクソだ。哲は、僕

の友達は、クソじゃない。調子になんて乗ってない。人を馬鹿にしているのは、こいつらの方じゃないか。

「何か言ってみろよ！　お師匠さんよ！」

下らない理屈だ。下らない自尊心だ。下らない人間だ。

こんな連中に、僕は一言でも言ってやるもんか。ほんの少しでも、折れてやるもんか。そう、何度も頭の中で叫び続けた。

僕は間違ってない。嘘は言ってない。

哲は間違ってない。嘘は言ってない。こんな奴らの手の届かない場所まで、哲は行くんだ。絶対だ。哲なら、きっと行けるんだ。

何度目かの嘔吐の後、僕は意識を失った。

そして、意識を取り戻したとき、車の助手席だった。

担任の、高橋先生の車の。

病院に運ばれた僕は、一通りの手当てを受けると、検査も兼ねて入院ということになった。骨折もしているという話だった。自分では良く分からないし、痛みもない。そう言うと、医者の先生に「殴られたときってのは、寝て起きると痛くなるものなんだよ」と言われた。いくつか渡された飲み薬は、そういう痛みや炎症を抑えるためのものらしかった。

でも、翌朝僕の体は酷く痛んだ。言葉で表現しようにも、言葉が出て来ない程に。

事の顛末は、高橋先生が両親に話してくれたようで、僕は特に咎められなかった。先生も事情を良く分かっていたのだろう。僕に対して同情的ですらあった。

軽音楽部は、一ヶ月間の部活動停止。僕に手を出した連中は、一ヶ月間の学校謹慎。僕は退院したら、今まで通りの学校生活に戻る。それが双方に下された裁決だった。

それで、あの下らない連中とも関わらずに済む。僕はそう思っていた。

哲は、そうじゃなかった。

翌日の昼過ぎ。先生と母さんが帰ったのを見計らうようにして、哲が病室にやって来た。

「お見舞いに、栗持って来た」

茹でても剥いてもいない栗を貰ってどうにか出来るはずもなく、僕は苦笑してから袋を受け取り、ベッドの縁に掛けておいた。

「傷、痛むか？」

「大したことないよ」

実際、薬が効いている。それに、痛いと思ったら連中に負けたことになる。そう思っていた。

「軽音楽部の連中だってな。聞いたよ」

「違うよ」

担任の先生には、口止めをしておいた。哲が知っているはずもない。

「俺のせいか？」
「関係ないって」
何とか嘘で誤魔化そうとするが、哲はそれほど鈍くはなかったようだ。全く、普段は呆れるほど鈍いのに、どうしてこういうときだけ聡いのだろう。
「あいつら、許せねえ」
「それより、僕の部屋にギター置いたままだっただろう？　母さんに言っておくから、今日辺り取りに行きなよ」
しばらく入院らしいから、とは言わなかった。
哲は黙っている。黙って、立ったまま、俯いて、拳を握り締めていた。
僕は溜め息を吐いて、哲に話しかけた。
「あのさ、哲は他に大事なことがあるだろう？　僕がどうなったって、関係ないじゃないか。それより、ギターの練習でもしてた方がよっぽど建設的だと思うよ。授業を抜け出してまでお見舞いに来るなんて、少し心配し過ぎだしね」
「けど……」
「それと、絶対報復なんてするなよ」
そんなことをしたら、あいつらと同じになる。僕が意地を徹した意味もなくなる。
哲は俯いたまま、しばらく黙っていたが、「分かったよ」と言って病室を出て行った。
僕は溜め息を吐いて、天井を見上げた。嫌味なほど白い天井に、また溜め息が漏れた。
その日の夕方、哲がまた病院にやって来た。担任の先生に連れられて。
もちろん分かるだろうが、全身に僕より酷い怪我を負って、だ。呆れてものも言えなかった。
僕は部屋を移され、哲と同じ病室を宛がわれた。哲も入院するらしい。当たり前だろう。あの怪我では。
余ったベッドには、僕と哲それぞれの母親が交代で泊まることになった。僕ら二人がこれ以上馬鹿なことをしないように監視するため、だそうだ。
おかげで僕らはろくに会話も出来ず、お通夜のような雰囲気で夜を過ごすことになった。

翌朝は、哲にとっても僕にとっても最悪の朝だった。
朝食を済ませると、面会時間も始まっていないのに、高城さんが病室にやって来た。勢い良く部屋の扉を押し開けて。
「哲くん」
恐ろしく優しくそう呟くと、足音を立てて哲のベッドの前に立った。家に着替えを取りに戻った母さんたちが、恨めしかった。
「梓歩ちゃん、おはよう」
迷った挙句、哲が口にしたのはそんな言葉だった。悪くはない。でも、少しは頭を使うべきだった。

「おはよう。良い朝ね。思わず馬鹿みたいなことをして入院することになった彼氏の顔を見にせっかくの休日を無駄にしてまでわざわざ早起きして病院に来ちゃうくらい良い朝よね。そう思わない？」

穏やかな笑みを浮かべたまま、いつもと変わらない口調で淡々と、高城さんはそう言った。正直、怒鳴られる方がずっとマシだった。

「高校生にもなって殴り合いのケンカなんてして。相手は五人？哲くんがそんなに自殺願望溢れる人だとは思ってもみなかったわ。本当に私って男を見る目がないのね。そういうことなんでしょう？」

「いや、その……」

哲はぶつぶつと何かを言い返そうとしているのだが、言葉にはならなかった。それで良い。こういうときは黙って聞いている方が話がこじれなくて済むのだ。

「いくら石田君が親友で、大事な人だからって、望んでもいないのに復讐して、挙句返り討ちに遭うなんて。それとも、石田君は敵討ちをお願いしたの？」

急に話を振られたので、声が出なかった。

「どっちなの？」

「ええと、その……」

多分、どう答えても僕まで怒られる。そう思ったので、黙って頷くしかなかった。

「分かりました。二人とも良い機会だから、思い切り反省して下さい。私がどれだけ心配したと思ってるのよ。今度同じことがあったら、二人とも絶対許さないからね」

「ごめんなさい」と謝った僕ら二人は、世界の誰が見ても一番惨めな顔をしていたと思う。

その後も、高城さんの説教は続いた。母さんたちが戻ってくる昼前までずっと、だ。

細かいことから大きなことまで、ちくちくと言葉で責められ、説教が終わる頃には僕たち二人とも、泣き出しそうなくらい打ちのめされていた。

哲の母親と高城さんは、とても親しげに話をしていた。初対面とは思えないほどに。やはり、同じ男の馬鹿な部分に振り回され続けているので、相通じる部分が出てくるのだろうか。そんなことを思った。哲にとっては針のむしろだっただろうが。

「陽司」と、二人きりになった部屋で哲が話しかけて来た。僕は喉の奥だけで返事をしておいた。

「なんか、ごめんな」

どのことに関しての謝罪なのかは分からない。でも、それが哲から僕に向けられた初めての謝罪の言葉だった。

「とりあえず、高城さんだけは何とかして」

そして、これが一番の本心だった。

哲は苦笑し、僕も力なく笑った。

この件に関して、哲への処分は一切なかった。ただ、相手にした五人の軽音楽部の連中は、学校謹慎から自宅謹慎へとランクアップしたらしかった。

様子を見に来た担任の先生が言っていた。

「お前ら、少しは先輩たちを立てることを覚えろ」

何故僕らが怒られるのかは分からなかったが、とりあえず頭の隅にでも置いておくことにした。

それと、入院の間に僕らには課題が出された。それも、恐ろしいほどの量の課題だ。

「どうせ退屈だろうし、成績優秀な二人が授業についてこれないってのも、担任としては寂しいからな」

僕らは怪我の治療に専念することも出来ず、ベッドから起きられない状態で課題を解き続けるはめになった。左手の指を骨折した哲が、ページをめくろうとする度に小さく呻いていたのが、記憶に残っている。

僕らの退院が決まったのは、十二月に入ってからすぐだった。三者面談は病室で済ませていたし、期末テストの範囲は課題で済ませておいた。試験当日までに退院出来たのは、喜ばしいことだった。病室で先生に監視されてテストなんて、考えただけでもぞっとする。

僕らが入院している間、高城さんは毎日顔を出していた。怒りは冷めたらしく、いつもと同じ穏やかな高城さんだった。

他にお見舞いに来る友人はいなかった。哲のバンド仲間や友人が来てもおかしくないとは思っていたが、一度も顔を出しはしなかった。後で担任の先生に聞いたところ、「見舞いは禁止にしておいた」ということらしかった。まあ、正直どっちでも良かったし、相手をする余裕もなかったので構わなかったが。

僕と哲は、同じ日に退院をした。哲の方が重症だったのだが、体の造りが違ったのだろう。元々肉体派の上に、この時期になると一層体つきが大人びてきていた。哲が僕を見上げていた頃がとても懐かしかった。

両親は荷物を持って先に家に帰ってしまったので、僕と哲、それと高城さんの三人だけが残された。

いつものファミレスで昼食を取った。久し振りのまともな食事だった。病院食は食べた気がしなくて困る。特に育ち盛りの高校生男子には、質、量、共に物足りない。

哲の口からは、ギターについてのことが出なくなっていた。

入院の間、何度も母さんに頼もうとしたのだが、哲がその度にはぐらかしていた。あれだけ熱心に、欠かさず練習していたのに。もっとも、哲の左手はギプスで固定されていたし、病院でギターの音なんて弾いたら看護婦さんに怒鳴られる。でも、せめて手元に置いておくべきだろうと、そう思っていた。

食事を済ませた後、哲は高城さんとデートをすると言って駅前の方へと歩いて行った。僕は久し振りに本屋を巡り、目ぼしい本

を買い漁った。

部屋に戻ると、以前より寒々しい感じがした。入院している間に、季節がひとつ巡ってしまった。そういうことだったのだろう。そう思うことにしておいた。

母さんの計らいで用意されていた石油ファンヒーターのスイッチを入れ、僕はベッドを背もたれ代わりにして床に腰を下ろした。

夏の始まりに、哲はギターを買うと言った。ギタリストになりたいと言った。夏休み一杯バイトをして、夏の終わりにギターを手に入れた。秋の文化祭でギタリストの入り口に立ち、やっと夢を叶え始めた。

そして秋の終わり。下卑た悪意のせいで、哲はギターから引き離されてしまった。

指は、もう完治したはずだった。リハビリはそれほど必要ないと言っていた。でも、哲はまだギターを手にしない。取りに来ない。

数日経てば、哲はこの部屋でギターを弾くだろうか？　それはないような気がした。週明けには期末テストだし、それが終われば終業式にクリスマス。あっという間に年が明けて、三学期が始まる。哲がギターから逃げる気なら、いくらでも言い訳は出来そうだった。

僕は立ち上がって、ギタースタンドの前に移動した。真っ赤なSG。SGというのは、ソリッド・ギターの略らしい。意味や由来は良く覚えられなかった。とにかく、哲にとっての宝物だ。

哲のSGは、買った日よりもずっと疲れ果てて見えた。薄っすらと埃を被って、まるで敗残兵のようにすら見えた。ハードタイプのギターケースから、布を取り出す。哲がいつもそうしていたように、僕はギターを布で優しく拭った。何度も、何度も。

ボディの表面はつやを取り戻し、気のせいか誇らしげにすら見えるようになった。あちこちについた傷さえ、勲章のように思えた。

僕は哲の真似をしてギターを抱いてみたけれど、どうもしっくりとこなかった。試しに弦を指で弾いてみた。鳴った音は、不安になるような音だった。

僕は目を閉じて、哲がギターを弾いている場面を思い起こした。左手の長い指が、まるで別の生き物のように動く。正確で、繊細で、素早かった。右手がピックを持ち、力強く弦を鳴らす。両方の手が、それぞれに別の役割を果たして、ひとつの音を奏でる。ギターという楽器を通して、哲が完璧な部品になったようにすら思えた。音楽のための、完全な姿。

哲はロックとかパンクとか言われる音楽を好んで聴いた。優しいからと、そう言っていた。僕は歌詞の聴き取れない歌のどこが良いのか分からなかったし、ギターのやかましいだけの音も好きになれそうにはなかった。でも、哲は僕にたくさんの音楽を聴かせ続けた。一曲一曲、逸話や思い入れを語りながら。

どうして覚えなかったのだろう。

どうして哲がバンドを組むときに、手伝うと言わなかったのだろう。

哲は、僕にとって大切な友達になっていたのに。
僕はギターをもう一度拭い、スタンドに戻した。
哲の夢は、もう足を止めてしまったのだろうか。そんなことを考えると、苦しかった。
僕らの世界に存在する形の見えない悪意が、とてつもなく呪わしかった。
その夜、僕は初めて壁を殴りつけた。

4.

師走は足が速い。
期末テストも無事終わり、結果はかなりのものだった。僕も、そして哲も、お互いに学力の上では立場を確立したということだろう。周りの視線も、気にならなくなっていた。
冬休みに入って、クリスマス。哲は当然のように彼女と夜を共にして、寝たようだった。ついに哲も男になったということだろう。
でも、哲はギターを手にしなかった。僕の部屋にすら、ほとんど訪れなかった。

年が明けて、三学期が始まった。哲は僕の部屋に顔を出す回数を減らしていた。
「店が忙しくてさ、日数増やされたんだよ」
言い訳のようにそう告げる哲は、僕の目を見ていなかった。
僕はまた生徒会に誘われ、断り、僕だけしかいない部屋で本を読み漁った。砂漠を行く旅人が水を飲むように、ひたすら読み続けた。そして時々、哲のSGの埃を布で拭った。
ある日、教室で高城さんが話しかけて来た。珍しいことだった。
「哲くん、最近おかしくない？」
僕にそんなことを聞かれても困る。でも、少し変わったということには気付いていた。気付けば髪を伸ばし、髪型を変えていた。服の趣味も変わったし、体格も一回り大きくなっていた。あれは一朝一夕でつく筋肉じゃない。僕に隠れて、毎日トレーニングでもしていたのかもしれない。それと、あまり喋らなくなった。寡黙になったと言っても良いくらいだ。一番の変化は、聴く音楽が変わったこと。うるさいだけの激しい音楽じゃなく、ジャズとかブルースとか、そういう落ち着きのある音楽を好んで聴くようになっていた。
哲は、変わりつつあった。
「今日、多分僕の部屋に来るはずだから、少し話してみるよ」
哲の変化が、何を思ってのことなのか。どこを見据えてのことなのか。僕も、そろそろ知っておきたかった。

哲は温かい缶コーヒーを二本持って、夜更けに部屋を訪れた。
「まだ、しばらくは寒いな」
ファンヒーターで掌を炙りながら、そう呟いた。

「哲」と僕は名前を呼んだ。何度も、何度も呼んできた、僕の友人の名前。

「ギター、そろそろ再開しても良いんじゃないか？」

僕の台詞を無視して、哲はオーディオセットの前に移動し、CDをかけた。サックスとピアノ、それに男性の伸びのある歌声が特徴的な、最近哲が気に入っている曲だった。

「あの高校を選んだのってさ、軽音楽部があるからだったんだよな。でも、仮入部に行ったらクソで、なんだかなあって思っててさ。そしたらちょっとかわいい子がいて、彼女になってくれて。ギターを始めたのだって、結局どうだって良かったのかもしれない」

哲はぼんやりと左手の指先を見詰めながら、いつになく疲れた口調でそう呟いていた。聞くべきだ。黙って聞くべきなんだと、そう思った。

「でも、弾き始めたら面白くなってきてさ、このままギタリストってのも悪くないと思ってた。けど、陽司まで下らないことに巻き込んでさ。本当に悪かったと思ってる」

「だから辞めるのか？」

腹立たしかった。何より、そんな言い訳に僕を使われることが、悔しかった。

「そうじゃないんだ。結局のところ、誤魔化してただけなんだよな。本当にやりたいことを、手の届きそうなことで誤魔化して、逃げてるだけだった。そんなじゃあ、本当に頑張ってる人たちに申し訳ないだろ？」

どうだって良い。そう思った。

「それで哲はギターを辞めて、捨てて、今度は違う嘘を吐いて手頃な夢に逃げ込むのか？」

「そうじゃないって」

哲は少し笑った。笑って、顔を上げた。

真っ直ぐな目だった。

「歌を唄いたいんだ」

哲は変わったと、本当にそう思った。僕に向けられた目は、揺らいでいない。声も、顔も、笑っていない。真剣な目と表情が、僕に真っ直ぐ向けられている。こっちが落ち着かなくなるくらいに、真剣だった。

「ガキの頃、初めて見たライブでさ、ギターって楽器が格好良いって思った。でも、それよりも歌を唄う人が気持ち良さそうで、羨ましかった。いつかあんな風に歌を唄えたらなってずっと思ってた。けど、仮入部に行った軽音楽部で酷いこと言われてさ、嫌んなったんだよ。だから、歌を唄うことを諦めた」

馬鹿だよな、と哲は自嘲的に笑った。

「今度は、諦めないよ。嘘でもない。俺は歌を唄うし、いつかヴォーカリストとしてステージに立つ。今度はコピーだけじゃない。自分自身で作った歌だって唄いたい」

「そうかい」

僕はそう言って、頷いた。

「でさ、音感には自信あるんだけど、どうすりゃ良いと思う？」

そう言いながら僕に詰め寄る哲は、いつかと同じく子供のような顔をしていた。新しいおもちゃを買い与えられた、あの顔だ。

哲は変わったけど、変わっていない。それが、僕には嬉しかった。

ボイストレーニングと、毎日のランニング。それと作詞のための勉強。哲が当面取り組むのは、そういったものだった。とはいえ、僕が手伝えることは何もなかった。文系の成績では、哲と僕はほとんど同じくらいになっていたのだから。

ヴォーカリストを目指して練習を始めた哲の下には、自然とメンバーが集まっていた。以前一緒にバンドをしていたメンバーだけじゃない。軽音楽部の、僕らを襲わなかった部員も、だ。その中に二人、凄いギタリストがいるらしかった。

「夕夜(ゆうや)さんと直音(なおと)さんっていうんだけど、とにかく凄いんだ」

興奮して話す哲は、本当に嬉しそうだった。

そんな哲を支えるように、高城さんも変わっていた。哲は以前のように勝手に無茶をすることが全くなくなり、代わりに彼女をいつでも気遣うようになっていた。高城さんもそんな哲の傍に寄り添い、いつでもフォローに徹していた。二人の関係が、新しくなっていった。

そして、僕はといえば。

「陽司、次のライブ来てくれるだろ？」

僕らが高校二年生へと上がる直前の春休み。哲はいくつかのライブハウスでのライブを予定していた。先輩たちが精力的に動くので、引っ張られるようにして哲も動くことになるという話だった。

「そうだね。行くよ」

いつものように、哲は僕の部屋にいた。チケットをテーブルの上に置いて、オーディオの前を陣取る。いつもと同じ、哲の背中。初めて見た頃よりも、ずっと広く逞しくなった背中。そういえば、と思ったので口に出してみた。

「哲がこの部屋に来るようになったのって、何でだっけ？」

忘れるはずはない。でも、それを哲の口から聞いてみたかった。哲が覚えているのか、確かめておきたかった。

いつか哲が、この部屋に足を運ばなくなる前に。

「決まってるだろ？　陽司に恩返しするためだよ」

僕らが出会ったきっかけ。思い出せば頬が緩む、最初のきっかけ。

「あれ、嘘だったんだろう？」

「恩返しのことか？　忘れてないって」

肩越しに振り返る哲は、軽く微笑んでいた。

「そうじゃないよ。理想の子がいて、その子だけいれば他に何もいらない、って台詞」

僕の言葉に、哲は苦笑いを浮かべた。

「何かのドラマだか映画だかで聞いた台詞でさ、一度使ってみたかっただけだった」

やっぱり、と僕は思った。そんな都合の良いことなんてあるはずはないのだ。現に哲は彼女と付き合うようになってから、ギターを始めた訳だし。

「でも、今は少し違うな。梓歩がいなきゃ、俺は歌も唄えない」

「それ、何てドラマの台詞？」

茶化す僕に、哲は声を上げて笑った。ひとしきり笑った後に、体ごと僕の方を向いた。真面目な顔を作ったので、僕は本を置いて顔を上げた。

「陽司」と、哲が僕を呼んだ。何度も聴いた、僕の親友が僕を呼ぶ声だ。

「お前はさ、なりたいものってないのか？」

言われて、考えてみた。なりたいもの。

「まだ分からないな。とりあえず、高校生の間には見つけたいと思ってるけど」

「それだけ本を読むのが好きなら、小説家とかなれば良いのに」

僕は簡単にそう告げた哲に、首を振った。

「読むのは好きだけど、書く人間になるつもりはないよ」

偽りのない、本心だった。

「僕はきっと、他の誰が見ても退屈だとしか思えないような、そんな生き方が向いてるんじゃないかな」

「退屈な生き方なんてないだろ？　俺がいるんだし」

それに関しては、確かにその通りだった。

「よし、決めた！」

哲が膝を掌で叩き、立ち上がった。拳を握り締めて、僕を見下ろす。

「俺は、ずっと陽司を退屈させない。それが、俺の恩返しだ」

このときの哲の目は、それまでに僕に向けられたどんな視線よりも優しく、厳しく、そして温かかった。信頼と親愛に満ちた、泣きたくなるほど満たされる視線だった。

「なら、借り物の歌ばかり唄ってる場合じゃないと思うよ。そろそろ、メンバーに急かされてるんだろう？」

哲の、哲だけの、オリジナルの歌を。

「分かってるよ」

憮然とした表情で再び腰を下ろす哲に、僕は文庫本を開くことで答えたのだった。

こうして、僕らの猶予期間は緩やかに終わりへと向かおうとしていた。

## 5.

今、僕はこうして社会に出て、あの猶予期間のことを思い返している。テレビには、時々哲の姿が映ることもある。今では立派なヴォーカリストとして、世間の誰もが認めるほどになった。哲は、あの頃の夢をちゃんと叶えたのだ。

僕は高校を卒業すると、あの町を離れた。大学進学のためだ。それから大学院まで出て就職。地元に戻らず、離れた街で会社に勤めることにした。

今でも正月くらいは実家に帰るようにしている。でも、僕の部屋を哲が訪れることはない。高校を卒業してから、一度も逢っていない。聞くところによると、以前のバンドメンバーが交通事故で亡くなったり、高城さんと婚約を決めたりと、波乱万丈な日々を送っているようだった。

でも、哲とは逢っていない。連絡もしない。

僕は今でも本を読んでいる。たくさんの本が僕の部屋の本棚を埋めているし、収まりきらない本の一部を古本屋に持ち込んだりもした。街の図書館に通うのも、今では週末の決まりごとになっている。

あの猶予期間、僕らはたくさんの嘘を吐いた。些細なことから、大きなことまで。それこそ数え切れないほどたくさんの嘘だ。でも、誰かを傷つけるためじゃなかった。それだけは胸を張って言える。

だから僕は、青年期に入った今、あの頃の自分の台詞をもうひとつだけ、嘘にしてやろうと思っている。

僕の目の前には、白紙のノートと一本のペンがある。やるべきことは、もう決めている。

最初から上手くいくはずもない。最初から形を気にする必要もない。ただ、思う通りに描けば良い。頭の中に浮かぶ、たくさんのシーンを。その中に響く、たくさんの声を。

テレビに映る哲の姿。スピーカーからは、懐かしい声が聴こえてくる。あの頃の僕らとは、姿も場所も変わってしまったけれど——

哲の声を聴きながら、僕はペンを取った。僕らの青年期を、新しく描くために。